

医者も知らない 平穩死



連載⑬

末期がんになると、強い痛み
に襲われることが珍しくあ
りません。その痛みをどうコ
ントロールするかは、非常に
重要な課題です。

強い痛みは、免疫力を下
げ、病状を悪化させます。何
より、私は思うのです。患者
さんには、人生の最期の時ま
で、極力、幸せを感じられる
状態で過ごしてほしいと。

以前にもこの欄で紹介しま
したが、近年、医療用麻薬の
技術進歩は目覚ましい。しか
し、麻薬に対して(たとえ、
医療用麻薬でも)、恐怖心を
抱いている患者さんは少なく
ありません。でも、医療用麻
薬は正しく使えば、決して
「悪」ではありません。
「先生がそんなに言うんやっ
たら……」と使い始めた患者
さんが、痛みが消えて、ホッと
した笑顔を見せてくれると、

〈長尾和宏〉長尾クリニック院長。
日本尊厳死協会副理事長。著書に
「『平穩死』10の条件」など。

麻薬で痛みが 消えないのは

こちらもホツとします。これ
まで苦しんでうなるばかりだ
ったのが、会話ができ、笑いも
見せてくれるようになること、
心からうれしくなります。
痛みを軽減させるための麻
薬の量は、患者さんごとに、
また病気の時期によって、全
く違います。医療者は、その
時々に適した麻薬の投与量を



(写真はイメージ)

探る作業をしなくてはなりま
せん。これをタイトレシーヨ
ンといいます。

あらかじめ決められた麻薬
量を投与したらOK……とい
うわけではないのです。最初
に投与した量ではほとんど効
かず、何度も量を調整した結
果、ようやく患者さんの痛み
が軽くなったということもし
よつちゅう。必要なければ、
減らすこともあります。患者
さんの痛みに寄り添う感性
が、医療者には求められてい
ます。

ただ、日本における医療用
麻薬の使用量は、国際的に見
てかなり少ない。「(家族
が)入院した時、麻薬を使
つても、痛みは消えへんかつ
たで。」という話を時々聞き
ますが、おそらく麻薬の量や
鎮痛補助薬が適切ではなかつ
たのでしょう。

平穩死を希望するならば、麻
薬の使い方、つまりは緩和医
療に精通した医師を探すこと
も大切なポイントなのです。